

随 想

フジコー技報第24号によせて

公益財団法人北九州産業学術推進機構
半導体・エレクトロニクス技術センター
開発支援部 部長
田中 康彦
Yasuhiko Tanaka



もう 10 年以上前になるが、最初にひびきの学研都市を知ったのは、ひびきのに勤務し始めた 1 年ほど前で、会社の元上司が勤めている北九州産業学術推進機構のイベント(ひびきのサロン)に一度参加してみようと思ったのがきっかけであった。

当時、北九州市立大の教授をされていた杉本先生の発表を聞いて衝撃を受けたのを覚えている。それから暫くして役員に報告する機会があり、海外規格に対応した製品を米国に展開しようとしていた時期でもあったため、早速、社内で若手開発者を集めて杉本先生に講演を依頼することになった。当時、製造物責任が大きく取りざたされてきて、特にヨーロッパやアメリカで日本企業が大きな保証をせざるを得ない状況を多々見かける時代であった。そんな時期に、当時国内大手エレベーターメーカーの製品が米国で事故を起こし大きな負担を強いられるようになった(資料がなく記憶だけであるが・・・)例を挙げて説明された。

キーワードは「スチュワードシップ」というもので、これはキリスト教会に由来する言葉で、「キリスト教の聖書の創世記で、神が人間を特別に能力あるものとして最後に創造した理由を、それ以前に造った弱い被造物を助け、適正な管理を人間にさせるためであるという聖書の新しい解釈」に基づくものらしいが、聞きかじりの知識で難しくなるので、ここまでにとどめるが、つまり、リスクが十分小さいから「安全」と判断したとしても、残留リスクに事故の可能性が必ず残ると考えなければならない。

そこで、何よりも重要なのは、最善の安全確保を講ずるとともに、その限界を明確に示して、使用者

に対して事故防止を要請することである。すなわち、この要請を正しく行って得た権利として、設計者はなおわずかに残る事故の可能性に対する免責を求めることができる。これが、PLP(Product Liability Prevention)の基本的な考え方となっている。

当然であるが、たとえ残留リスクが小さくとも、どんな事故も被災者は受容しないという考えでは、リスク社会は成り立たない。欧州の安全認証制度では、被害者に事故の受容を求めるが、その考え方として、キリスト教会に古くからある Stewardship という責任の考え方が強い影響を与えているという認証制度では、事故に直接かかわる機械の製造者と使用者を“安全の当事者”とし、国は従来の許認可権を行使するのではなく、両者の正統な関係によって高度の安全を作り出すためのシステムを担当するというのである。

今から 30 年以上も前だが、米国に 3 年近く住んでいたことがあって、当時独身で今考えると自分ひとりのことだけを考えて生活すれば良い気楽な時代であったが、そのとき米国製の製品を購入すると必ず免責事項が書いてあり、‘そんなことまで使用者に求めるのかと、日本ではあり得ん’とアメリカの企業を馬鹿にしたものだった。しかし、明らかにこの Stewardship の考え方がベースにあったのだと、杉本教授の講演を聴いて、そのとき衝撃を受けた。

我々日本人の多くは、仏教らしく振る舞っているが、本当のところは(私だけかもしれないが・・・)儒教のような、仏教のような日本独特の考え方を作り上げてきて、徐々に世界標準から離れてきた感が

ある。現地で仲良くなった友達に神の存在を信じるかと聞いたことがあったが、迷わず‘y e s’であった。もちろん、彼は毎週教会に行く比較的熱心なキリスト教であったが、アメリカでは、キリスト教の比率が多く、こういった考え方が背景にあるように思える。海外に商品展開するとき、そういった背景を理解せずに日本流の発想で進めると痛い目に遭うことがわかった。

我々日本人は、完全でない商品は出してはいけないと思いがちで、つい少しのリスクがあれば売れないか、日本流の理屈をつけてしまいがちであるが、それを押し通すと、ときには集中攻撃を浴びせられ会社の経営を左右するほどの莫大な損害を被ることも起こりうる。前出のように利便性、安全性などが格段に向上するものであれば、設計面で最善の手段を尽くして、最後に残るリスクを予測し、事故を防ぐための役割を利用者に求めることで最善のシステムを構築することができるという考えである。欧米の安全規格はこの考えに沿って作られているということを頭の片隅にとどめておくことも重要であるように思う。

私が住んでいたのは 80 年代のアメリカで、当時から銃の所持は、当然のように各家庭に数丁持っていた(今も変わらないと思うが・・・)。友人の家に遊びに行くと、友人の父親が、奥の方から自慢げにライフルを持ってきて触らせてくれた。「撃たせてあげるから今度休みに猟に行こう」と誘われたものだったが、当時あまり興味がなく、ゴルフやスキーばかりやっていたので実現しなかったが、今思えば行っておけば良かったと後悔しているところである。テレビなどの報道によると、今ではネットでも簡単に買えるらしい。ボストンの郊外に住んでいたが、車で数分走ると、一軒家の敷地は、数百坪あり、隣の家まで離れていて叫んでも助けに来てくれない距離がある家が殆どであった。警察も日本の駐在所なるものはなく、街の中心地にある警察署から駆けつけるため、すぐには対応してもらえない、身を守るのは自分しかないという考えが一般的で、銃を取り上げるとどうやって身を守るか不安でたまら

ないという気持ちも分からないでもない。基本そういう社会で、日本とは随分環境が異なる。

毎朝会社にコーヒーとドーナツを売りにくる 40 代の男性がいたが、前年に奥さんを亡くしたとのこと。訳を聞いてみると高速道路で警察に止められ、免許証を取り出すためにバッグに手を突っ込んだところ、その警察官に撃たれたとのこと。会社の同僚は、あり得ることとして受け止めていたが、日本人の私からすると大変衝撃的な出来事であった。不用意な動作をしたことが原因とも想像できるが、警察官の正当防衛としてかたづけられたらしい。それでもアメリカでは、銃を放棄しようとの議論にはならないらしい。

銃に限らず、ドラッグもまん延しており、1980 年代の話だが、当時でも大学生の殆どは、経験しているとのこと。夜一人で町中を歩くのは、成人男性でも危ない状態であった。今は少し良くなったと聞くが、日本のように女性が夜道を一人で歩くなどは考えられないことであった。

いろいろお話ししてきましたが、国内だけに居ては、分からないことがたくさんあり、日本の国内標準は必ずしも世界標準ではないということを肝に銘じてほしいと思います。

フジコーさんには、オンリーワンの技術をさらに磨きをかけ、世界にはばたく企業に成長していただくことを期待しています。